



タオル



象徴

しょうちよう

象徴と比喩

『虹の足』では、形のない抽象的なものを、具体的なものによって表現することや、その表現したものを象徴（シンボル）ということを学びました。例えば、「平和」という形のないものを、「鳩」を用いて「鳩は平和の象徴」と表します。同様に、「白は清純さの象徴」などということもできます。

別のもので表現するという意味では、比喩と似ていますが、比喩は似ている物事を用いて表現するもので、たとえられるものもたとえるものも、同じレベルの具体性をもっています。例えば、「雪のように白い鳥」というとき、「雪」も「鳥」も、「白」を共通してもっている具体的なものです。

このように、同じ「白」を用いていても、象徴と比喩とでは表現の仕方が違います。象徴は比喩と違って、はっきりとした類似性をもとにしていないため、必ずしも万人にその意味するものが通じるとはかぎりません。

例えば、皆さんは「鳩は平和の象徴」ということを聞いたことがあったかもしませんが、知らなかった人は「鳩」が出てきたときに、それが「平和」を意味

目標

- 文学的な表現を通じて語感を磨き、語彙を豊かにする。
- 登場人物の設定の仕方や人物どうしの関係を捉える。

象徴

時間と構成／夏の葬列
語り手の位置／走れメロス

象徴

清純さ…抽象



白



雪 鳥…具体

比喩

しているのだと理解することはできないかもしれません。

「白」も、必ずしも「清純さ」というプラスイメージばかりを象徴するわけではありません。逆に「無意味」や「空虚」などマイナスイメージの象徴にもなります。あるものが何を象徴しているのかは、文脈によって読み解いていかなければなりません。

さまざまなレベルの象徴

象徴的な表現では、ものや色といったレベルだけでなく、一つの物語全体が何か別のものを象徴しているということもありえます。文学作品の中にあるさまざまなレベルの象徴を読み解いていくことで、作品をより深く理解できます。

例えば、「桃太郎」の物語では、鬼退治は人生上の「試練」を象徴していると考えることができます。

『タオル』でいえば、ほかのものとは違って、祖父の「タオル」には特別な意味があるのではないのでしょうか。少年が、最後にそれを頭に巻いて写真撮るとには、どんな意味があるのでしょうか。作品全体の文脈からイメージを読み解いていくことが大事です。

このように、物語を読むときは、ただストーリーの展開を追いかけるだけではなく、物語の中に出てくる具体的なものや物語そのものが、何か別の抽象的なものを表していないかと考えることで、読みを深めていくことができます。

15

10

5



ヒント

- 作中に出てくるものが、何か別のものを表現していないか、考えてみよう。
- 右で見つけた表現は、比喩なのか、象徴なのか、考えてみよう。

象徴といわれるものには、ほかにどんなものがあるだろうか？





夕オ

重松清
しげまつ きよし

午後になって少年の家を訪ねてきた客は、初めて見る顔だった。背広に黒いネクタイを締め
ているのは、朝から入れかわり立ちかわりやってくる他の客と同じだったが、家の外にいた親
戚せきに挨拶する時の言葉づかいが違った。「このたびは、どうもご愁傷しゅうしょうさまです。」――テレビで
しか聞いたことのない東京の言葉だった。

祭壇さいだんのすぐ前に座っていた父は、その人が来たのを知ると、玄関まで迎えに出た。

「よう来てくれました、ほんまに、お忙しいのに……。」

父はうれしそうで、懐かしなつそうだった。久しぶりにお兄さんおにいさんに会った弟のように、自分より
少し年上の客を、まぶしそうに見つめていた。

「十二年ぶりになるのかな。」

「もう、そげんなりますか……。」

10

5

▼ 締

▼ 戚

ご愁傷さま
相手を気の毒に思うさま。ここでは、身内を亡くした人に対するおくやみの言葉として使われている。

▼ 愁

▼ 壇

そげん
そんなに。

父はそばにいた少年の肩を抱いて、「ほな、コレが生まれる前いうことですか。」と言った。
「息子さん？」

父は少年の名前を客に告げ、小学五年生なんだとも伝えて、「ほれ、挨拶せんか。」と少年の背中を軽く押した。

少年が細い声で「こんにちは。」と言うと、客は体をかがめ、少年と目の高さを合わせて、「お父さんによく似てるね。」と笑った。

父はてれくさそうに「似とるんは勉強のできんところだけですわ。」と言って、客を座敷に招き入れた。

少年も客の後ろについて座敷に入る。

今朝からずっと——本当のことを言えば、二日前に祖父が亡くなってからずっと、家のどこにいればいいのかわからずにいた。

二階の自分の部屋は、親戚の着替えのための部屋になった。一階の部屋のふすまはあらかたはずされ、玄関の引き戸もさつきはずされた。通りに面した窓は白と黒の幕で覆われ、幕の前には花環はなわがたくさん並べられた。台所には町内会のおばさんたちが出たり入ったりして、母の姿を探すだけでも大変だった。

「邪魔になるけん、外で遊んどりんさい。」と母に言われ、家の前でサッカーボールを蹴けっていたら、目を真っ赤に泣きはらした叔母おばに「こげな日にふらふら遊んどつたらバチが当たるよ。」と叱ちられた。しかたなく家に入ってテレビをつけると別の叔母に「音を出したらいけん

▼肩

邪魔になるけん

邪魔になるから

遊んどりんさい

遊んでいなさい。

▼蹴

こげな日に

こんな日に。

いけんよ

いけないよ。

文 てれくさそうに

15

10

5

よ。」と言われ、マンガを読んでいたら漁協の組合長が「おじいちゃんのそばにおつてあげんさい。」と酒に酔った声で言つて、そのくせ祭壇の設けられた広間に行つてみると、大人たちが集まつていて、座る場所などどこにもなかった。

おじいちゃんが死んだ。

それは、わかる。

ずっと一緒に暮らしていた祖父だ。かわいがつてもらつていた。「中学生になったら、おじいちゃんの船で漁に連れていってやるけん。」と口癖のように言つていた祖父が、脳溢血で、お別れの言葉を交わす間もなく死んでしまった。

おじいちゃんが死んだのは悲しいことだ。

それも、わかる。

悲しいときには、泣いてしまう。

それだつて、ちゃんとわかっている。

なのに、涙が出てこない。悲しいかどうかもはっきりしない。自分の居場所を見つけれないと、ゆっくり悲しむこともできないのかもしれない。

父に案内されて祭壇の前に座った客は、丁寧なしぐさで合掌と焼香をした。父以外の誰も知り合ひではないのか、広間にいる人たちは皆、げんそうな顔で客の背中をちらちら見ていた。客のほうも、焼香を終えたあとは広間にいる理由をなくしてしまったように、どこか居心地悪そうだった。

15

10

5

漁協

漁業協同組合の略。

そばにおつてあげんさい

そばにいてあげなさい。

脳溢血

脳内の血管が破れて出血を起こす病気。脳出血ともいう。

▼掌

文 どこにも……ない

文 ……かもしれない

意 しぐさ

意 げん

意 居心地

客は、今夜の泊まり先に、町内の民宿を予約していた。父は「ウチに泊まってもろうてもよかったのに。」と少し残念そうに言って、戸口の脇に立ったままだった少年を呼んだ。

「おじちゃんを『みちしお荘』まで案内しちゃってくれや。」

「……うん。」

「ほいで、どうせおまえはここにおつても邪魔になるだけじゃけえ、お通夜が始まるまでおじちゃんのお世話して、町の案内でもさせてもらえや。」

母に続いて父にも「邪魔。」だと言われたのは悲しかったが、とりあえず道案内と客のお世話という仕事を与えられてほっとした。

客が玄関で靴を履いている時、父は初めて「ほな、シライさん、またあとで。」と客を名前で呼んだ。客も「ハジメさんも、あまり無理して疲れを出さないようにしてください。」と応えた。ハジメというのが父の名前だ。漢字で「一」と書く。

「お待ちせ。」

シライさんは玄関の外で待っていた少年に声をかけ、大きなバッグを肩に提げて歩きだした。礼服装にはあまり似合わない、リュックサックのようなバッグだった。

少年の家から『みちしお荘』までは、海に沿った一本道だった。夕方のなぎの時間にさしかかって、風が止まり、よどんだ潮のにおいが濃くなっている。

「二人まとめて厄介払いされちゃったな。」

シライさんはそう言って笑った。ヤツカイバライの意味はよくわからなかったが、なんとなく

▼泊

▼荘

邪魔になるだけじゃけえ
え 邪魔になるだけだから。

▼なぎ

風がやんで、波が穏やかな状態になること。

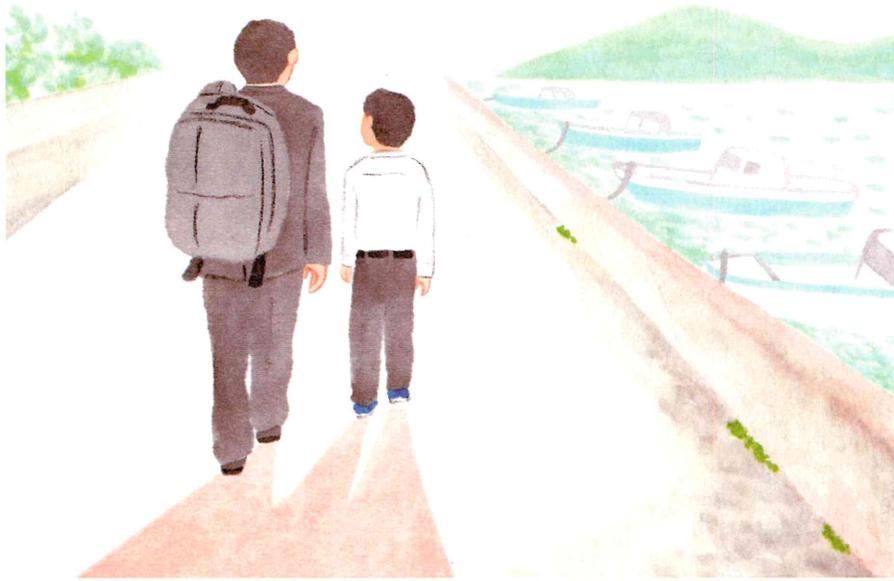
▼介

意 厄介払い

15

10

5



くシライさんが「俺^{おれ}たちは同じだな。」と言っ
てるんじゃないかと感じて、それがちよつと
うれしくて、少年は自分から話しかけてみる
ことにした。

「お父ちゃんと知り合いですか？」

「ああ。お父さんとも、亡くなったおじいさ
んとも知り合ってたんだ。」

「漁に出てたんですか？」

「いや、そうじゃなくて……。」

シライさんは歩きながらバッグの腹を軽く
たたいた。「取材をしたんだ、おじいさん
の。」——シライさんは旅行雑誌の記者で、
十二年前に祖父をグラビアページで紹介^{しょうかい}
したのだという。

「見たこと、あります、それ。」

「そうか。おじいさん、カッコよかっただろ。」

少年は、こくん、とうなずいた。祖父を褒^ほ
められてうれしかったのが半分、残り半分は、

15

10

5

▼ 紹介
グラビアページ
雑誌などで写真を多用
したページのこと。

シライさんの話にうまくついていけたことで、うれしいというより、ほっとした。

祖父は地元で一番の腕をもつ一本釣りの漁師だった。今の、この季節——春先にはタイを狙う。夜明け前に港を出て、まだ日の高いうちに一日の仕事は終わる。

「その頃はまた、お父さんは見習いみたいなもので、おじいさんの船に乗って、しょっちゅう叱られてたんだ。髪も今みたいな角刈りじゃなくて、リーゼントで……リーゼントって、わかるかな？」

本当はよくわからない。わからなくてもいいや、と思った。自分が生まれる前の父の姿はアルバムの中の古い写真で何度か見たことはあっても、こんなふうに誰かから話を聞くのは初めてだった。

シライさんは「あとで写真見せてやるよ。」と笑った。「たくさん持ってきてるんだ。」

少年は少し足を速めた。お父さんの知らないところで、お父さんの昔の写真を見て、お父さんの昔の話を聞く——というのが、いい。買ってきたばかりのマンガを開くときのように、胸がどきどきして、わくわくする。

『みちしお荘』は、船だまりのすぐ前にあった。古びた漁船が二十隻近く並んだ中に祖父の船もある。ひとときわ古い。少年が中学校に上がったなら船を新調しようかと話していて、それっきりになってしまった。

シライさんは宿帳に名前を書いたあと、部屋には入らずに、一階の食堂に少年を誘った。「ジュース飲むか？」

一本釣り

一本の釣り糸で魚を一匹ずつ釣り上げる漁法のこと。

▼釣

リーゼント

髪型の一つ。

船だまり

船が風や波を避けるために停泊する場所。

▼隻

「……はい。」

「じゃあ、ジュースと、ビール。」

注文を取った『みちしお荘』のおかみさんは、少年を見て「おじいちゃんも急なことじゃつたなあ。」と寂し^{さび}そうな顔になり、頭をなでてくれた。

ビールとジュース、それに「サービスです。」とゆてたイカの小鉢^{こぼち}がテーブルに並んだ。この地方でベイカと呼ぶ、春^{しゅん}が旬^{じゆん}の小さなイカだ。酢味^{すみ}噌^そで食べると、すっぱさの奥でじんわりと甘^{あま}みがにじむ。

「人が亡くなったときには乾杯^{けんぱい}つていわないんだ。献杯^{けんぱい}つていうんだ。」

ケンパイ。また知らない言葉が出てきた。ふだんなら、家に帰って母にきけば、すぐに漢字を教えてくれる。でも、今夜はたぶんそんなことを話しかける余裕^{よゆう}はないだろう。

ビールとジュースのコップを軽くぶつけてケンパイすると、シライさんはビールを一口飲んで、ふうう、と声に出して息をついた。

「写真、見せてやるよ。」

床に置いたバッグのファスナーを開け、中からぶ厚く膨らんだ封筒^{ふうとう}を取り出した。

「これ、全部写真なんですか？」

「ああ。全部、おじいさんとお父さんの写真だよ。」

ほら、これ、とシライさんは封筒から出した写真を何枚かまとめて少年に渡した。

祖父と父がいた。船に乗っていた。二人とも今よりずっと若い。父はまだ二十歳^{はたち}そこそこで、

15

10

5

▼ ▼
筒 封

▼ ▼ ▼ ▼ ▼
献 甘 酢 旬 鉢

意
じんわり

祖父も還曆かんれき前だった。

はげていない頃の写真を見せたらおじいちゃんは恥はづれかしかるだろうか、とクスツと笑いかけて、ああそうか、と頬をすぼめた。もうおじいちゃんと話すことはできないんだな。おとといから何度も思ってきたことなのに、今初めて、それが悲しさと結びついた。

漁をしている時の祖父の写真は、どれもタオルを頭に巻いていた。いつもだ。昔から変わらない。最後の漁に出たおとといもそうだった。出かける前に庭のほうに回る。漁の道具をしまった納屋なやの脇に、針金を渡した物干し台がある。昨日のうちに干しておいたタオルをそこから取って、キュツと頭に巻き付けて、「ほな行ってくるけん。」と港へ向かう。漁を終え、魚市場に魚を卸おろし、仲間と軽く一杯やっから家に帰ってくると、頭からはずしたタオルを水洗いして、物干し台の針金に掛かける。ずっとそうだった。毎日毎日、それを繰り返していた。

「ほら、この頃はまだお父さんの霧囿かみい気、あんまり漁師らしくないだろ。」

「……はい。」

「漁師を継つぐのは嫌いやだ嫌いやだって、俺と酒を飲むと文句ばかり言ってたんだ。」

「そうなんですか？」

「今は、生まれついで漁師です、って顔してるけどな。」

シライさんはおかしそうに笑った。

グラビアの撮影さつえいの仕事は一週間ほどだったが、家に泊まり込んでの取材を続けたおかげで、祖父や父とすっかり仲よくなった。

15

10

5

▼ 卸 掛 霧 継

意
霧囿気

「仲よくなつたっていつても、俺は東京だから、年賀状のやりとりぐらいしかできなくて、おじいさんが生きてるうちにもう一度会って写真を撮りたかったんだけど……。でも、昨日ハジメさんから連絡れんらくもらつてうれしかったし、けっこうスケジュールはキツかったんだけど、ボクに会えたから、やっぱり来てよかつたなあ、って。」

シライさんはバッグから別の封筒を取り出して、中に入っていたはがきを「特別に見せてやるよ。」と少年の前に置いた。

年賀状だった。差出人さしだしは祖父。印刷された文面の横に、手書きの一文が添えられていた。

「愚息ぐそくもようやく一丁前になり、孫もこの四月で六年生です。三代で船に乗れたらうれしいことです。」

祖父の字だ。まちがいない、これはおじいちゃんの字だった。

「ボクは大きくなったら、何になりたいんだ？」

てれくさかつたが、正直に「Jリーガー。」と答えた。シライさんは「そうか、じゃあもつとたくさん食べて、もつと大きくならないとな。」と笑ってくれた。

日が落ちてから、少年はシライさんと二人で家に戻もどつた。

シライさんはお通夜の焼香を終えると、広間で親戚や町の人たちと酒を飲み始めた。シライさんの持つてきた祖父や父の若い頃の写真は、みんなの思ひ出話きかたの肴さかなになっているようだった。

少年は、また居場所をなくしてしまい、外に出てそつとサッカーボールを蹴つたり、台所を

15

10

5

▼絡

▼愚

肴

酒を飲むときに食べるつまみのこと。ここでは、酒を飲むときに興をそえる話題の意味として使われている。

■文面



のぞいたり、階段の踊り場に座ってマンガを読んだりして暇をつぶした。『みちしお荘』にいた頃はあんなに仲よしだったシライさんが、家に着くとあっさり大人の仲間に入ってしまったのが、ちよつと悔しかった。

台所の前を通りかかった時、叔母さんたちの話し声が聞こえた。祖父のなきがらを清めていた時の話だった。首筋のしわをタオルで拭いていたら、潮と、魚と、それからさびのにおいが立ち上ってきたのだという。「何十年も船に乗ってきたんじゃけん、体に染みついとるんじゃろうねえ。」と叔母さんが言うと、母が「お義父さんは風呂が嫌いじゃったけんねえ。」と返し、

5

▼ 悔
▼ 拭
▼ 呂

みんなで懐かしそうに笑っていた。

おとといまではこの家にいた人のことを、もうみんなは思い出話にしてしゃべっている。急に寂しくなった。涙は出なくても、だんだん悲しくなってきた。

玄関からまた外に出て、庭のほうに回った。

納屋の脇に、ほの白いものが見えた。

祖父のタオルだった。

手を伸ばしかけたが、触るのがなんとなく怖くて、中途半端な位置に手を持ち上げたまま、しばらくタオルを見つめた。

「おう、ここにおったんか。」

背中に声をかけられ、振り向くと、父とシライさんがいた。

「おじいちゃんの写真、シライさんに見せてもろうとつたら、おもしろかったんじゃ。おじいちゃんは漁に出るときはいつもタオルを巻いとつたらう。じゃけん、家におる時の写真を見たら、おまえ、みいんなデコのところ白うなつとるんよ。そだけ日に焼けとらんけん……。」

父はかなり酔っているのか、ろれつの怪しい声で言って、体を揺すって笑った。

「ほいで、今もそうなんじゃろうか思うて棺桶をのぞいてみたら、やっぱりデコが白いんよ。じゃけん、のう、シライさん、じいさんをええ男にして冥土に送ってやらんといけんものう……。」

涙声になってきた父の言葉を引き取って、シライさんが「タオルを取りに来たんだ。」と

▼ 怪
▼ 棺
▼ 冥



重松清「一九六三」

岡山県に生まれた。小説家。

作品に『ナイフ』『エイジ』などがある。

《出典》『はじめての文学 重松清』によった。

言った。「やっぱり、タオルがないとおじいちゃんじゃないから。」

父は涙ぐみながら針金からタオルをはずし、少年に「せつかくじゃけん、おまえも頭に巻いてみいや。」と言った。

シライさんも「そうだな、写真撮ってやるよ。」とカメラをかまえた。

少年はタオルをねじって細くした——いつも祖父がそうしていたように。

額にきつく巻き付けた。

水道の水ですすぎきれなかった潮のにおいが鼻をくすぐった。おじいちゃんのおいだ、と思った。

「おう、よう似合うとるど。」

父は拍手をして、そのままうつむき、太い腕で目もとをこすった。

シライさんがカメラのフラッシュをたいた。まぶしさに目を細め、またたくと、熱いものがまぶたからあふれ出た。かすかな潮のにおいは、そこにもあった。

10

5

意 涙ぐむ
対 うつむく
意 またたく
類 かすかな

千 みちしるべ

内容を捉えよう

① この作品は、一行あきによって二つの部分に分けられている。それぞれの内容をまとめよう。

読み深めよう

② 祖父はどのような人物であったか、また、父やシライさんは、祖父の死をどのように捉えているか、考えよう。

③ 「涙」に着目すると、少年の気持ちには次の①～③のような変化がみられる。二つの課題について考えよう。

① 「なのに、涙が出てこない。悲しいかどうかもはつきりしない。」(P 26 L 13)

② 「急に寂しくなった。涙は出なくても、だんだん悲しくなってきた。」(P 34 L 3)

③ 「まぶしさに目を細め、またたくと、熱いものがまぶたからあふれ出た。」(P 35 L 11～12)

(1) それぞれの描写から、少年のどのような気持ちが読み取れるか。

(2) 少年が①～③のように変化していくのは、なぜか。

自分の考えを伝え合おう

④ 「かすかな潮のにおいは、そこにもあった。」(P 35 L 12)とは、どのようなことか。考えを交流しよう。

⑤ この作品の中で「タオル」は何を象徴し、どのようなはたらきをもっていると考えられるか、話し合おう。

美評

谷口さん 「タオル」はどこに出てきたかな。

花野さん シライさんが撮影した写真を見せてもらおうところ
で、「漁をしている時の祖父の写真は、どれもタオルを頭に
に巻いていた。」とあったね。それから作品の終わり近く
で、少年が納屋の脇にあった祖父のタオルを見つけるとこ
ろ。

青島さん そのタオルを少年が額に巻いたところも、シライ
さんに写真に撮ってもらおうよね。写真にも重要な意味があ
るんじゃないかな。

言葉・情報

● 言葉と表現

この作品では登場人物がさまざまな呼ばれ方をしている。誰が、どのように表現されているのかを確認し、その効果を考えよう。



26 掌 シヨウ ウ 掌握	25 蹴 シユウ ウ ける 一蹴 石蹴り	25 肩 かた 肩書き	24 壇 ダン 壇上	24 愁 シユウ ウ 郷愁	24 戚 セキ 親戚	24 締 テイ シマ 締結 締め切り
30 鉢 ハチ 鉢植え	29 隻 セキ 一隻	29 釣 ツル 釣り人	28 紹 シヨウ ウ 紹介	27 介 カイ 介入	27 莊 ソウ 荘厳	27 泊 ハク とまる 外泊 宿に泊まる
31 卸 おろし 卸し売り	30 筒 ツツ 筒先	30 封 フウ ホウ 開封 封建	30 献 ケン カン 献立	30 甘 カン あまい 甘言 甘い味	30 酢 サツ す 酢酸 酢の物	30 旬 ジュン 旬 上旬 旬の味

この教材で学ぶ漢字

振り返り

□ 象徴的に表現された物事や心情について考え、少年の気持ちなどがどのように変化したかを捉えているか。
 □ 登場人物の設定の仕方や人物どうしの関係を捉え、それぞれの考え方や生き方を読み取っているか。
 □ この作品の中で、最も印象に残った場面や登場人物とその理由を交流しよう。

新出音訓
 26 焼香 (シヨウウ)
 「付表」の語
 25 叔母 (おば)
 26 心地 (こち)
 30 二十歳 (はたち)

●小学六年生の漢字
 28 雑誌
 27 潮
 25 幕
 25 窓
 31 物干し
 31 針金
 30 何枚
 台

32 絡 ラク 短絡的	31 継 ケイ つぐ 継ぎ目 継続	31 雰 フン 雰囲気	31 掛 カケル かかり 乗客掛 掛け算
33 呂 ロ 風呂	33 拭 フク ぬぐう 拭き掃除 手拭い	33 悔 カイ くいる 悔しい 悔しが 悔いが残る	32 愚 ブ おろか 愚かさ 愚直 愚恨
	34 冥 メイ 冥界	34 棺 カン 出棺	34 怪 カイ あやしい 怪しい 光 怪物